

史談

2017 (H29) 3. 27

■ 白鷹町史談会 60 周年記念事業 が開催されました

平成 29 年 2 月 18 日に、荒砥地区コミュニティセンターで、白鷹町史談会 60 周年記念事業が開催されました。記念式、記念シンポジウム「鮎貝の歴史と文化」、祝賀会と盛りだくさんな会でした。



合わせて、記念誌として『史談』第 28 号が刊行されました。

第 28 号 目次

(設立 60 周年記念号 2017 年発行)

史談会 60 年あれこれ 会長 丸川二男
ごあいさつ 町長 佐藤誠七
発足 60 周年を記念して

教育長 沼澤政幸

史談会 60 年の歩み 平吹 利数

I 湯殿山・塩田行屋・八日講

ふたたび湯殿山へ 伊藤 隆

塩田行屋の文化財概観…展覧会に伴う調査で判明したことについて 宮本 晶朗

出来町八日講 江口 儀雄

II 鮎貝の歴史と文化

鮎貝城址 平吹 利数

天正 15 年の鮎貝氏と伊達正宗の動向

渋谷 敏己

古文書読みの落とし穴 佐藤 與七

祖父 高橋與三郎について 高橋 敏郎

「中里の池」のこと 竹田 伊智子

蓮窓寺・法讚寺・豊忠・常観 丸川 二男

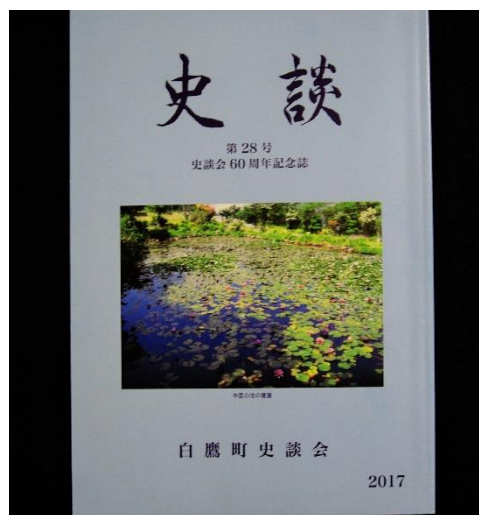
中山寺 木造三十三観音像の施主人調査

について 石井 紀子

奥村幸雄先生が書かれたもの 守谷 英一

史談会と古文書研究会 菅野 志郎

「文化財めぐり」に参加して 竹田 美紀



町立図書館で販売しています。1 冊 1,000 円です。

■ 「武蔵御岳」行

丸川二男

東京の奥多摩に御岳山という山があり、その山頂に武蔵御岳（むさしみたけ）神社

という古い社があることは知っていた。だが、なかなか行く機会がなかった。

この二月の半ばに上京した折、思い切って朝から出かけた。昔、一度行ったことがあるという姉が同行してくれたのも心強く、晴れて風がないのも幸いだった。青梅線で御岳駅まで行き、そこからバスとケーブルカーを乗り継ぎ、さらに参道を歩くこと二十分余り。標高にして約九百メートルのところに大小の宿坊が二十軒ほど立ち並ぶ。その軒先をくねくねと歩いて登ってゆくのが表参道である。途中には幹の途中に大きなコブをつけた「神代ケヤキ」があり、その下を通り、急な石段を登っていく。両側には関東のあちこちの講中が建てた大小の参拝碑が立ち並び、参拝客の多さを裏付けている。やがて唐風の大きな神社の前に出る。拝殿は朱色で塗り替え中だった。頭の上に金色の鈴はあるが、どういうわけか鳴らすための緒がない。



ここは九百二十九メートルというから、高尾山よりも少し高い。それに人が少ないだけ静かにかえって落ち着く。前方の眺めはいいのだが、山に囲まれているせいか、視界が狭く方角がわからない。そこに境内を掃除している女性がきて「こっちの方角にスカイツリーが見える」と教えてくれた。目を凝らすと向かいの山の先に、上半分がかすかに肉眼で見た。どうも社殿は東向きらしい。拝殿の前に大きな変わった形の狛犬がある。ふと台座に目をやると「西望

塑人謹作」とある。あの北村西望かと思っ
て社務所の人に聞いたらその通りで「ここ
は狼で、一対で五千万です」と聞きもしな
いが値段まで教えてくれた。なるほどあち
こちの狛犬とは違うわけだが、それにし
ても迫力のあるもので、ほれぼれとする狼
である。ここは「お狗様」とかで、犬を連
れた参拝者とよく会う。途中のケーブルカ
ーにもペットの席があった。

お参りした後、神社から人気のない参道
を下って帰る途中、みやげもの屋の店先で
メガネをかけたおばあさんに声をかけられ
た。店の中をながめていたら食堂の方から
嫁さんらしい人がお茶を持ってきて、食堂
の方に案内してくれた。そのおばあさんは
腰もしゃんと伸びていて、耳は聞こえる。
年を聞いたら九十になるという。しかし、
どう見ても九十には見えない。どこから
・・・と聞くので山形からきたといっ
たらすぐさま、昔、最上川を船で下り、羽
黒山にお参りしたことがあるという。この
おばあさんは今も店のメニューや団体客の
歓迎の看板を、今でも立ったまま書くと聞
いて、書道を習い、かつ教えている姉もま
たびっくりする。

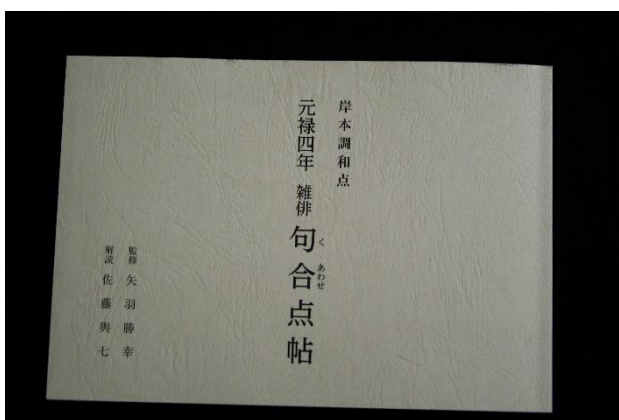


ソバを注文してコップ酒を口にしたら、
これが水のように呑み口のいい酒で、「澤
乃井」という銘酒だった。嫁さんが言うに、
おばあさんは暗算も得意で計算機がいら
ないのだい。亭主は四十半ばで倒れ、十八
年ほど扱ったという。九十年の半分は後家
さんということになる。関東のどこだかの
神社の娘で、この神様のお札を配っていた
縁で嫁にきたが、ケーブルカーがなかつ
た頃は下から歩いて上ってきたという。足

腰がしゃんとしているのもそのせいだろう
 といい、息子らしい人の姿がないので聞くと、
 これが医者をしているという。店はいっ
 つ閉じてもいいらしいが、このばあさん
 を見るために登ってくる人もいるという。
 嫁さんに「この人がしゃんとしているう
 ちはやめられないね」というと、笑い
 ながらうなずいている。「来年、また
 来る」とは言ったものの、あっちが先
 か、こっちが先かはわかったものでない。
 記念の写真を撮り、竹のしゃもじを
 もらって山を降りた。参道の脇のやぶ
 にはマンサクの黄色い花が咲いていた。

帰り足で、御岳駅から多摩川にかかる
 橋を渡ってすぐそばの川合玉堂美術館
 にまわる。ここも以前から気にしてい
 たところで、「玉堂」と聞いただけで震
 えがくる。ここ御岳には戦時中に玉
 堂が疎開して住んでいたことから、
 この美術館が建ったという。いつ頃
 のものか、玄関を入った正面に飾ら
 れている玉堂の顔写真がいい。むろ
 ん絵はどれも逸品そろいである。建
 物も庭もまわりの風景に溶け込んで
 いて、ついここが東京であることを
 つい忘れてしまうような、まさに至
 福の時と場所でもあった。

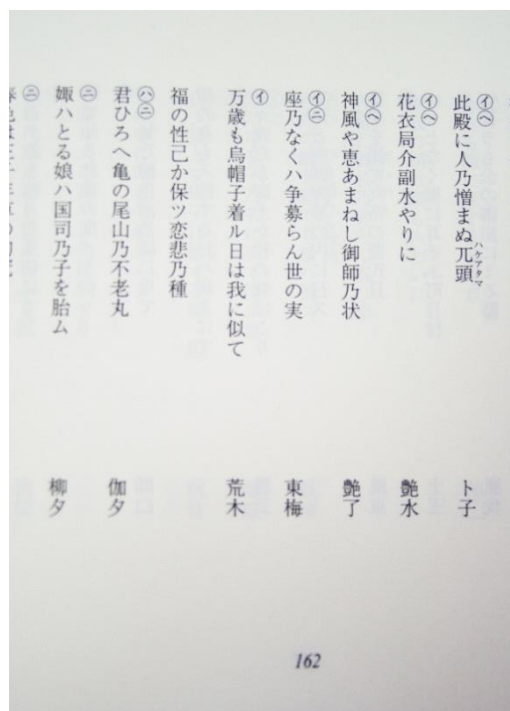
■『岸本調和点 元禄四年 雑俳
 くあわせてんちょう
 句合点帖』について
 守谷英一



会員の佐藤興七さんが、鮎貝の角七（加
 茂川酒造 鈴木家）に伝わる文書から発
 見した黄茶色の用紙の分厚い俳句の本
 を発見した。それをこつこつと時間を
 かけ解読し

た書物が『岸本調和点 元禄四年 雑俳
 句合点帖』として発行された。監修を
 した二松学舎大（東京）の矢羽勝幸客
 員教授によると、全国的な俳諧史を
 研究する上で貴重な資料になるとい
 うことである。書名は、岸本調和（
 きしもとちょうわ）が元禄四年の
 応募された付け句に、点をつけた帳
 面という意味である。

選者の岸本調和という人は、江戸時代前



期-中期の俳人で寛永 15 (1638) 年
 に陸奥 (むつ) 岩代 (いわしろ) (福島
 県) に生まれ、江戸の石田未得 (み
 とく) に師事し、俳諧宗匠として活
 躍した人である。大名や旗本を門
 人にもち、勢力をほこったが、松
 尾芭蕉 (ばしょう) らの台頭で前句
 付点者に転向した。正徳 5 (1715)
 年 10 月 17 日、78 歳で死去した
 という。俳諧撰集に「富士石」、
 前句付集に「洗朱 (あらいしゅ)」
 など。辞世の句は、「此一句衆議判
 はなし木枯の」とあるという。

「付け句」というのは、宗匠が前句
 (五・七・五) または後句 (七・七)
 を出題し、付け句 (前句の出題に
 対しては後句、後句の出題に
 対しては前句) の善し悪しを競
 うものである。そして、その応募
 された句と点数を記入したものが
 「句合点帖」である。

このようなものがどうして鮎貝
 にあった

